

国内販売では全く問題にはならないが、輸出につきものなのが為替と関税のリスクだ。まず為替についてだが、主要な輸出先の台湾について説明すると、産地から東京や

5万トン時代へ

青森リンゴ輸出

20

横浜などの輸出港にリンゴが出荷されて台湾側の貿易業者に渡された時点で決済が行われる。これをFOB取引と呼んでいる。

相手国の港渡し取引

その場合は相手国の港に到着した時点で決済され、海上運賃や保険料などが上乘せられて清算される。いずれも円建て取引になるので、為替レ

為替レートの変化

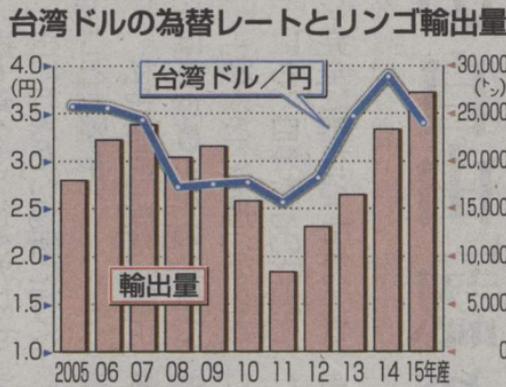
円安とともに輸出量増

年で1台湾ドルが2・6円。逆に最も円安が進んだのが14年の3・9円で双方の開きは相当大きい。

例えば1万円のリンゴを買った場合、11年産は3846台湾ドルが必要だったものが、14年産は2564台湾ドルあれば

いいということだ。台湾側の業者にとつては、為替だけで1282台湾ドルもかかるというところになる。

自由貿易協定が成立して、ニュージーランド産リンゴの関税が撤廃された途端、ニュージーランドのシェアが拡大するさまをまざまざと見せられた。産地間競争の火種は単にリンゴそのものの評価以外にさまざま要因があるのだと、痛感させられた。



※毎年輸出が最盛期の12月初めの1台湾ドルが日本円でいくらかを調べ、当該年産の台湾向け輸出量と比較した。15年産は4月末現在

安が進んだ。12年以降は円相が登場した。安倍晋三首が登場した。しかし、13年にニュージーランドと台湾の間で

一方の関税だが、台湾はWTO(世界貿易機関)に加盟した02年の時点で日本のリンゴの関税を50%から20%に引き下げており、それだけで市場競争力が出たと考えていた。

5月20日に台湾新政権が誕生した。蔡英文総統は、環太平洋連携協定(TPP)参加を表明している。これが実現すれば、日本リンゴの関税撤廃で競争力がさらに増すことだろう。

局長 深澤守